

第1回 資本主義における搾取の仕組み

資本主義はなぜ「強力」か、対抗する力はどこから生まれるか

1. 資本主義の基礎構造 — 商品経済と労働力の商品化

(1) 商品経済の一般化

資本主義社会=商品経済が一般化・普遍化した社会。

商品の本質:使用価値と価値。

○使用価値=具体的な有用性・自然的性質。豚肉は食べると美味しい・体をつくる栄養になる。市場に出ない共同体内消費・自家消費の豚肉は使用価値を持つだけで、(交換)価値は持たない。

○価値(交換価値)=市場で交換される生産物が持つ性格。社会的な意味の性質(自然は使用価値を生むが交換価値は生まない)。その価値の量は生産に必要な労働の量(時間ではかられる)で決まる。

○価値の実体=抽象的人間労働(社会的平均労働時間。具体的有用労働、Aさんの労働、Bさんの労働ではなく、コメを作る労働、自動車をつくる労働ではない)。

(2) 商品の価値の実体は労働である

「価値」は人々の勝手な主觀が生むのではなく、「労働」が生む。何故そう言えるか。

まず前提として、あらゆる社会に普遍的な原則がある。つまりひとつの社会においては、その社会が動員できる労働時間の総量は主觀的にでなく客觀的に与えられている。その有限な総労働時間が、その社会の存続のために必要とする物質的富の様々な種類の生産に割り振られ、順当な再生産が行われなければ、社会は存続できない。

しかしこの原則は、社会関係によって異なった現れ方をする。社会に合意機関や单一の意思決定機関などがあれば、あらかじめ「労働時間」を基準にして、この生産物にはこれだけの労働時間、別の生産物にはこれだけの労働時間をと割り振られる。前近代社会では慣習・伝統・倫理・宗教・命令が作用した。

市場社会のように社会的合意や单一の意思決定機関が無い場合は、それぞれ分立した生産単位の判断と見込みで、労働時間を支出して生産物を生産し、それを市場に出て他の生産単位が生産した他の生産物と交換が試みられる。その生産物が社会的必要に対応しているかどうかはあらかじめは分からず、市場に出てうまく交換できたときにはじめて確認できる。その交換を律するのが「価値」であり、他の商品(穀物、毛皮、銀や金)との交換比率として現れる。その実態が労働である。

(3) 複雑労働などは単純労働の累乗へと還元される

複雑労働・精神労働は単純労働の累乗と見なされる。これは頭の中でかってな計算ではなく、現実の社会と経済が実際に行っている事を頭で整理したもの。Aさんが従事しているフロア・トイレなどの清掃労働の経済的評価は、Bさんのコンピュータのプログラミング労働と数倍の開きがある。しかし、不思議なことに同じ基準=円で評価されている。複雑労働などの単純労働への還元は現実社会が行っている還元であることが、ここにも示されている。

2. 労働力の商品化と搾取のメカニズム

(1) 労働力という特殊な商品

労働者は生産手段を持たず、自らの「労働力」を資本に売る。卖るのは「労働」でなく「労働力」=労働する能力。

農民や職人など生産手段を持つ者たちからの生産手段の剥奪、売るものとして労働力しか持たない人々の大量創出が前提。囲い込み運動などの歴史的意味

(2) 労働力の価値とは何か

労働力商品の価値は労働者自身の働きぶり(頑張ってる、いい加減など)の評価によってではなく、この特殊な商品の生産に必要な労働量=労働時間によって決まる。つまり「労働者の生活維持に必要な諸商品(コメ・野菜・衣類・住居等々)の生産に必要な労働時間」によって規定される。したがって労働者が消費する必需品の価値が下がれば、労働力の価値も下がる。逆の場合は逆。

(3) 搾取はどこで起きるのか

労働者が労働力を価値通りに売る、資本家は労働力を価値通りに買う、等価交換。

それなのに、なぜ搾取が生まれるのか。

労働過程に入ると、労働者は自分の労働力の価値を再生産する以上の労働をする。

例えば 8 時間労働のうち 2~3 時間で自分の生活費に相当する価値を生産する。

残りの 5~6 時間は資本家のために労働をする。

この剩余労働から生まれるのが剩余価値。

(4) 搾取拡大の三つの方法

搾取の増大は、

第一に、労働時間を延長する。これが絶対的剩余価値生産。

第二に、技術革新や労働強化などで必要労働時間を短縮する。相対的剩余価値生産。

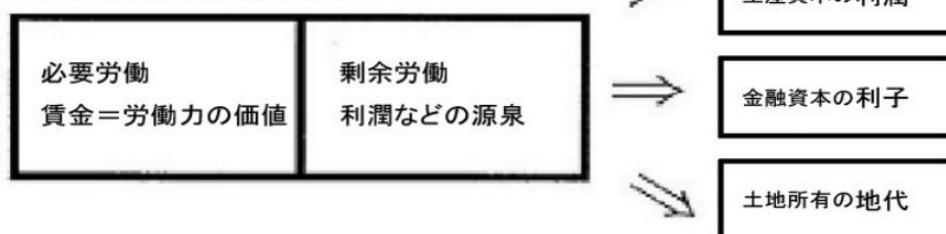
第三に、労働力を価値以下で買いたたく。

そしてこの剩余労働から生まれる剩余価値が資本(生産資本、商業資本、金融資本、レント資本等々)の利潤・利子・地代などの源泉。

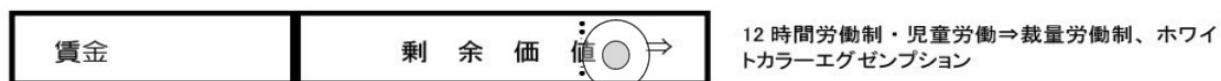
「搾取」は表面的には自由で平等な契約と交換(賃労働と資本)に隠されている。ここに資本主義の強さの理由のひとつがある。

必要労働は労働力の再生産費。

剩余労働は資本が取得して利潤などとなり、さらなる搾取の手段となる。



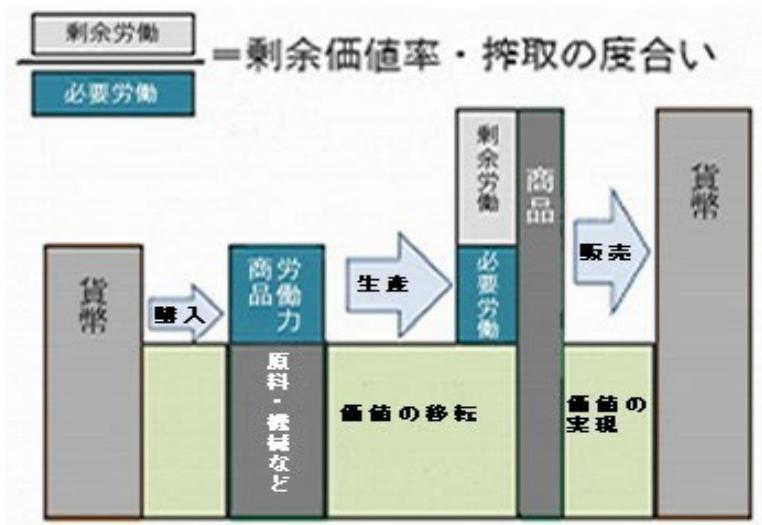
①絶対的剩余価値の生産=労働日の延長により、必要労働時間を変えずに剩余労働時間を拡大



②相対的剩余価値の生産=技術革新・協業分業・労働強化。同じ時間でより多くの製品を生産することで、1単位当たりの商品の価値が下がる。商品価格が下がることで、労働力の再生産費・賃金も下がり、剩余価値が拡大。価値の下がった商品をより安くより多く売ることで、より大きな利益・特別利潤も得る。



③賃下げ・労働力の価値以下の買いたたき。価値法則の侵害だが、資本主義の下では常態化。図は上の相対的剩余価値の生産と同じだが、剩余価値を生み出す方法がまったく違っている。



3. 摺取の歴史的展開

ア 19世紀:自由競争資本主義

- 小規模資本の競争による市場拡大。
- 労働者階級の形成、摺取の露骨な形態(長時間・児童労働、大人10~18h、子ども14~16h)。
- マルクス『資本論』が描いた典型的局面。

イ 20世紀前半:独占資本主義と帝国主義

- 資本集中・金融資本の台頭。
- 帝国主義戦争=資本の過剰蓄積と市場争奪の結果。
- 植民地支配・世界分割による剩余価値の強奪。

ウ 戦後:高度成長と「福祉国家」

- 大量生産・大量消費システム。
- 資本による剩余価値の増大と一部再分配(賃金上昇・社会保障)。
- しかし、労働強化・環境破壊・南北格差を伴う。

エ そして長期停滞と新自由主義

- 「利潤率の傾向的低下の法則」により資本蓄積が困難化。
- グローバル化・金融化・レント資本主義化(注)によって利潤率の低下を一時的に回避。
- しかしバブル崩壊、格差拡大、ひとり勝ち経済化、気候危機、人口減少による停滞。
- 摺取は非正規雇用・ギグワーク(隙間バイトなど)・移民労働・グローバルサプライチェーンで再編。

(注)IT・AIとレント資本主義化

今日の資本は労働の摺取から「情報・知識・プラットフォーム」の独占による収奪への移行を強める。プラットフォーム企業(GAFA、半導体、AI企業など)は、ネットワーク独占を通じて「レント(地代的収益)」を得る。ユーザーデータ、知財権、アルゴリズムなどを「囲い込み」、そこから持続的収益を吸い上げる。しかし限界も顕著。設備投資の巨額化 少数大企業の寡占化とリスク集中。しかし実体的利潤率は高くない。研究開発投資が膨張し利益は不安定。金融市場の影響も受け、株価変動が大で、資本の「順当な蓄積サイクル」が形成されにくい。

4. 資本主義における物神化、これが資本主義が「強力」である理由のひとつ

ア 商品の物神化

- 人間の社会関係が「物(商品)」の性質として転倒して現れる。
- 「商品の背後にある労働関係」が見えなくさせられる。
- 例:ブランド商品の「神秘性」、金融商品の「自己増殖する価値」イメージ。

イ 貨幣の物神化

○貨幣=「すべての商品の交換可能性」を表す。力で買えないものはない。

○人ととの社会関係が「貨幣と貨幣の関係」にすり替わる。

ウ 資本の物神化

○資本が「利潤を生み出す主体」として自立した力をもつかのように見える。

○しかし実際は資本は労働者の剩余労働の産物であり、それに制約される。

○人々の意識までも支配し、社会運動の困難さを生む。「マーケットに聞け」「マーケットには逆らえない」。

エ 対抗する力は労働者・市民の闘いの経験から生まれる

○正しい社会理論(資本の運動法則の理論的理解)だけでなく、現実の社会運動を通じた学びこそが人々動かす。この視点が決定的に重要。

5.まとめと討論の方向

ア 資本主義的搾取の基本メカニズム(労働力の商品化と剩余価値の創出)。

イ 歴史的展開:自由競争 → 独占・帝国主義 → 高度成長 → 長期停滞。

ウ 物神化が人々の意識を支配し、資本主義的支配の再生産に寄与する。

推薦文献

○佐々木隆治『私たちはなぜ働くのか マルクスと考える資本と労働』。

○佐々木隆治『マルクス 資本論第1部・第3部』。

○マルクス『資本論』第1巻(特に第4篇「相対的剩余価値の生産」・第1章「商品」)。

○大谷禎之介『図解 社会経済学』。

○南亮進『長期停滞の経済学』。